

教育研修委員会

委員長 馬場祥子

1. 2012年度第1回教育研修ワークショップの予定が 決まりました。

会期：2012年7月21・22日（土・日）

会場：東京、五反田の「ゆうぼうと」

詳細は日本死の臨床研究会ホームページをご覧ください。

2. 研修報告（教育研修委員 倉持、長澤、高沢）

テーマ：Whole Person Care ワークショップ

講師：Michael Kearneys先生ご夫妻(カナダモントリオールのMcGill大学で Whole Person Care のプログラム開発に参画。シシリー・ソンドース氏の愛弟子の一人)

会期：2011年10月1日～2日

会場：千里ライフサイエンスセンター

主催：公益財団法人 日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団

参加者：高沢洋子、倉持雅代、長澤昌子

内容(通訳はありましたが、全文英文の資料だったので各セクションのタイトルはそのまま英文表示します)

1. The philosophy of whole-person Palliative care
2. A self-awareness based model of clinical practice and self-care
3. Mindful awareness Creating a healing space
4. Self-Knowledge : Clinician Know Thyself
5. Self-Empathy & The Myth of Chiron : The Wounded Healer
6. The Story of the Rainmaker & Contemplative Awareness

感想

このワークショップでは、100種類位の絵葉書の中から、自分に響くカードを選びそれを使って自己紹介を行いました。なぜ、そのカードを選んだのか、自分自身への問いかけをする中で、自己の意識と無意識な部分に思いを向ける機会を得ました。

また、瞑想の時間を多くとり「自分は何者なのか、何が出来て何が出来ないのか、そのために何をどうしたらよいのか」を問い、見つめる作業の繰り返しでした。これらの経験から、目に見えない全人的な存在をケアする立場にある自分自身を考える機会になりました。

最近、緩和ケア(ホスピスケア)が、“身体の疼痛緩和”のための医療が先立ち、「全人的に診(看)る」視点が薄れてきてしまっているように感じる中で今回のワークショップは原点に戻ったように感じました。

教育ワークショップで行っている傾聴のトレーニングでは、ブロッキングをコントロールするということを学びますが、その方法として瞑想が役立つのではないかと感じました。

この研修で、自分自身を再確認することはできましたが、このようなワークショップを緩和ケアの教育に組み込むには時間や人数、プライバシーの保持など配慮する必要があると感じました。

最後に、この学びを研修プログラムにするための課題について話し合いましたが、具体的な方法を考えるのは難しいと感じました。